

【紹介】

昭和6年の博物館学 —博物館の特集号から—

Museology and Museography in 1931: Introduction of The Museum feature title

山本 哲也[※]

Tetsuya YAMAMOTO

1. はじめに

『博物館研究』が創刊されたのは、博物館事業促進会（現在の日本博物館協会）発足の昭和3年（1928）である。それは、博物館学史上、最も重要な意味を持つ専門誌の発行と言えるだろう。今ではそれ以外の博物館関係誌も多数発行されており、博物館関係以外の各種雑誌類においても博物館が特集として組まれることは多いのだが、『博物館研究』創刊からわずか3年後の昭和6年となると事情は異なる。その年に『科学知識』及び『国際建築』の二誌において、博物館が特集されていることは注目に値する。しかし残念なことに、その存在そのものは意外と知られていないのではないかと考えられる。博物館史・博物館学史に関わる文献をみても、その存在を示すものが見当たらないからである。

筆者は以前、「博物館学」の言葉の起源やその体系化の歴史に関わる資料を発掘し、「博物館学」遡及の可能性を示した事があり⁽¹⁾、そのような多くの認識のもとにはないのではないかとと思われる資料の蒐集を行っていく中で、これらの二誌に出会った。その他の文献については当学会の連絡誌である『学会ニュース』において徐々に紹介を進めているところであるが⁽²⁾、本稿で扱う二誌については相応の紙数を費やす必要があると考えるところである。そこで、日本の博物館史、博物館学史をより深化していくための基礎作業として、ここにその概要を紹介する。

2. 『科学知識』第11巻第11号「十一月特輯・科学普及と博物館」

『科学知識』は、(財)科学知識普及会により大正10年（1921）に創刊された科学雑誌である。今回取り上げるのは、その昭和6年11月号に当たる。B5判、総96頁で、定価は金五十銭。

特集名が「科学普及と博物館」とある。理科離れを防ごうと、今では博物館に期待される役割も大きいのだが、その昔も全く変わらなかったと思える特集名と言える。

さて、その内容であるが、まず表紙に驚かされる。「プラネタリウム」(杉浦非水画)が採用さ

※ 新潟県立歴史博物館

原稿受理日：平成22年10月29日

れているのである。

日本にプラネタリウムが最初にできたのは昭和12年、大阪市立電気科学館に初めて設置されたことであった。つまり、昭和6年の発行ということは、日本でのプラネタリウム初登場の6年前に、衝撃的な形で日本に紹介されたことになるのである。ほとんど見たこともない機器が、一枚の絵になって一科学雑誌の表紙に採用されていることに驚かされる。なお、日本に於けるプラネタリウムの紹介は、本誌で初めてなされたというわけではなく、例えば同じ『科学知識』の第10巻第3号(1930)で口絵写真にて「シカゴに新設されたプラネタリウム」とあるごとく、すでにそのような機器の存在は知られていたから“衝撃的”というのは少々大げさかもしれない。しかし、それにしても大胆な表紙の採用であることは間違いないだろう。

大阪の初めての設置のその計画段階にもない時期であるにもかかわらず、果たしてこの表紙の意味するものとは何か。それは、後の山本一清の文章にヒントが隠されているようだ。つまり、今後の日本国内に於ける設置への期待の表れと考えるところなのである。

次に、目次を見るだけでその内容の深さが理解されると思われるので、以下、列記する。⁽³⁾

口絵 東京科学博物館の紙上見学

口絵 興味百%実益多大なプラネタリウム

扉 百聞は一験に如かず

「科学博物館の教育的効果」東京科学博物館長 秋保安治 2～5頁

「世界の二大自然科学博物館」公爵 鷹司信輔 6～9頁

「独逸博物館」荏原製作所専務取締役 畠山一清 10～14頁

「東京科学博物館の沿革と現状」東京科学博物館学芸官 丸茂忠雄 15～18頁

「科学博物館陳列上の苦心」東京科学博物館学芸官 森 金次郎 19～23頁

「星の天をそのまゝに見せる 遊星儀の話(プラネタリウム)」理学博士 山本一清 24～27頁

「東京科学博物館の各部紹介」 28～33頁

▽理工学部 理工学部長 中村精二

▽動物の生態陳列 動物学部長 飯塚 啓

▽地学部の陳列に就て 地学部長 加藤武夫

▽植物学部の陳列 植物学部長 小倉 謙



写真1 『科学知識』表紙

「衛生博物館の設備」 棚橋源太郎 34～37 頁

「我が鉄道博物館」 鉄道省研究所長 工学博士 松縄信太 38～42 頁

「朝鮮の科学館」 朝鮮京城恩賜記念科学館長 重村義一 43～46 頁

「東京科学博物館の建築」 東京科学博物館長 秋保安治 57～59 頁

「その他の科学博物館」 81～85 頁

▽北大附属の博物館 ▽長岡高工の科学工業博物館 ▽満鉄の満蒙資源館

▽満洲技術協会工業博物館 ▽通信博物館 ▽名和昆虫陳列館

「蠟製模型の簡易な製作法とその苦心」 株式会社島津製作所標本部 小糸忠次郎 86～89 頁

「模型製作の苦心を語る」 山越工作所長 山越長七 90～91 頁

「鳥類の剥製法」 坂本喜一 92～93 頁

以上の通り、各博物館の紹介文が多いようにも見受けられるが、博物館特集としての充実振りは伺えよう。続いて、それぞれの内容について概観する。

口絵「東京科学博物館の紙上見学」「興味百%実益多大なプラネタリウム」

まず4頁を使って東京科学博物館の復興開館を大きく示す。またプラネタリウムの内容は表紙やその後の本文ともつながるものである。シカゴ・ストックホルム・ライプチヒ・モスクワ・ハノーバーの建物外観と、場所は不明ながら投影機、さらに「星辰の運行に驚きの眼をみはる観衆の一部」という写真構成になっている。

扉「百聞は一験に如かず」

巻頭言に当たり「百聞は一見に如かず」をもじったタイトルとなっている。「凡そ、理論の真義を解するには、事実の経験に立脚せねばならず、(中略)簡便なる説明実験の施設こそ、科学通俗化の最良手段である。」と言う。そして、「科学博物館の開設を祝する所以は茲に存する。」と、特集のきっかけが東京科学博物館の復興開館にあることを明らかにしている。

秋保安治「科学博物館の教育的効果」

緒論の位置付けというか、科学博物館に関する総論的文章が最初に置かれ、東京科学博物館長の秋保安治が担当している。

まず、「科学博物館は、自然科学及びこれが応用に関する学術的資料を蒐集・保存・陳列して、公衆の観覧又は研究に供する処である」という定義を紹介。「博物学や理化学及びその応用方面の一切を含んだものを意味する」とも言う。その後「自然科学の教養」、「民衆教育の効果」、「生活に直面する科学常識」の項を設け、科学博物館の意義を説く。特に最後の項で、「常設の機関であるのと、所謂呼物と称する人気取りの品物や、仕掛けが無く、真面目に教育的に経営せられて居るため、落付いて研究的に観察することの出来る利益がある。」としている点は注目に値する。そして「結論」として、「眼からの教育の外に、実地の体験を積ましむる教育的効果を伴ふの点に一大特色を存する」こと、「従来一つも権威ある科学博物館の存在を示さざりしことに一半の罪は帰する」として、「吾人この種博物館に関係するものは、異常の努力を以て、この種博物館の拡大と普及とに力を致さねばならぬことを痛感するものである。」と結んでいる。

鷹司信輔「世界の二大自然科学博物館」、畠山一清「独逸博物館」、重村義一「朝鮮の科学館」

緒論に続き、すぐに東京科学博物館の話題に行くのではなく、海外の科学博物館の事例紹介が置かれる。後半には日本統治時代に当たる朝鮮の関連内容が盛り込まれている。

「世界の二大自然科学博物館」は、ニューヨークとロンドンの2つの博物館を紹介するものであるが、最初に「博物館の設備と其国の文明」の項を設け、「博物館・図書館・動物園、この三つはその設備の良否に依つて、その国の文明の如何を知ることが出来るほど、国に取つて重要なものである。」とし、博物館等の施設の意義をまずは示して、その後各館を諸々紹介する。そして最後に「欧米に於ける一流博物館の二大目的」を「陳列品を完全に成るべく自然のやうに拵へて、他では見られないやうな博物学上の生態の有様を一般の人に見ることが出来るやうにすること」と、「完全な研究が出来るやうな研究室を備へる」とし、展示と研究の意義を説いている。さらに、科学博物館は、その内容が充実してくると「ナチュラル ヒストリー ミュージアム」と「科学工業の博物館」に分かれるのであり、そのように早く完備、分離することを期待している。

「独逸博物館」は、「ミラー博士の献身的偉力に依て建設され」た同博物館の偉容を、各室の紹介により示した上で、最も特徴的に捉えられる点として「陳列品に手を触る自由を与へてあることである。これでこそ初めて博物館が活きるので、「手を触る可からず」では理解も出来ねば、興味も涌かず、凡て死蔵し了る様な事になる。」と、今で言うところのハンズ・オン展示の存在とその意義を説いている。

「朝鮮の科学館」は、日本の博物館がアメリカに比べて極めて貧弱な状況にあるという、同年7月の大阪毎日新聞の社説を引用しながら特に科学博物館の現状を述べ（「実に寂寞たる現状」との表記も）、その後朝鮮総督府旧庁舎を利用した恩賜記念科学館が建設されたこと、そしてその経営等について説明するものである。中でも、土曜日午後を「子供の日」と定めて事業を実施していることにも触れていることは注目される。事業個々の詳細は不明ながら、例えば掲載写真にはスクリーンに向かう子どもたちが写っており、児童向けの事業が種々なされたことが伺われる。丸茂忠雄「東京科学博物館の沿革と現状」、森金次郎「科学博物館陳列上の苦心」、「東京科学博物館の各学部紹介」（四部門の紹介）、秋保安治「東京科学博物館の建築」

続いて東京科学博物館に関してと、そこから発展させた科学博物館論が断続的に掲載される。

「東京科学博物館の沿革と現状」は、湯島聖堂大成殿での公開という我が国の博物館の濫觴から、東京博物館、教育博物館、列品淘汰の訓令、東京教育博物館と棚橋源太郎の館長就任などを手短かに説明する。そして震災による焼失を経て秋保安治が館長となるまでの経緯を述べて現状について説明を加えていく。その内容を「建物」、「所在」、「開館」、「観覧」、「設備」、「陳列品」、「附帯施設」、「特別研究標本室」、「調査室」、「館外貸出」、「講演会」、「機関雑誌」、「別館」と分け詳細に述べており、特に「陳列品」に関して「従来の手を触る可からず主義を一切止めて、観者自ら自由に実験せしめ…」と、所謂ハンズ・オン展示への視点という先進的な試みを紹介しているところなどは、やはり注目される。また、「然し時代の寵児たる此科学博物館も年額八万円そこそこの経費にては、如何とも致し方がない。」という嘆きもあり、苦勞の様子が伺われる。

「科学博物館陳列上の苦心」では、「標本を生かすも殺すも実にその陳列の巧拙にありと断言してもよい程である」と、展示法の重要性を示した上で述べていくもので、展示資料や解説の多さから来る博物館疲労やターゲット設定の難しさとその必要性、模型製作の課題、また「観覧者自身に実験させるようにしたい」と、所謂ハンズ・オン展示の必要性はもちろん、逆にその安全性・耐久性・盗難の危険にも言及する。そして最後に、展示が完成するまでの準備から施工という見えない苦勞も伝え、「要するに博物館の仕事は優秀な職員とその努力、豊富な資金、相当の年月、十分なる陳列室等の各条件が満足されねば、優れた陳列も活発なる活動も出来るものではない。」と、一般には見えない苦勞の様子を伝えようとしている姿勢が見受けられる。

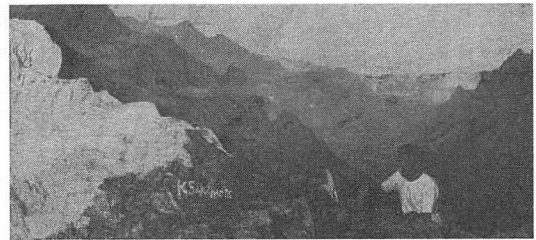


写真2 「動物の生態陳列」挿図写真から
製作中のハゲワシの生態陳列1・2

次に各部の紹介は、それぞれ部門別に担当を替えつつ執筆する。

中村清二「理工学部」では、またも所謂ハンズ・オン展示に当たる内容が記述される。「陳列が動的であることを必要とする」として、「入館者が実地作業すべきもの、即ち「陳列品に手を触るべからず」でなくして「成るべく実地手を出して研究して見よ」と勧誘すべきことを説く。

飯塚 啓「動物の生態陳列」は、「生態陳列」を「動物をその棲息する周囲の状況と共に観覧に供するを目的とする陳列法」と定義、紹介した上で、写真を示しつつその製作の様子を記し、展示製作の様子を伝える（写真2）。既に完成したものではなく、製作段階を見せているところが、なかなか興味深いものである。

加藤武夫「地学部の陳列に就て」では、「従来の一元陳列法を二元に為したことが根本の陳列改革である。」という一文があり、注目される。これまで、展示法の中で「二元」という用語を使用したのは棚橋源太郎の『博物館学綱要』であるという理解があった⁽⁴⁾。即ち、昭和25年の『博物館学綱要』において「二元配列」が説かれている。しかし、本項において既に使用されていることが確認されるのである。ちなみに同時代の東京科学博物館関連文献では、昭和6年の『東京科学博物館要覧』や昭和7年の『東京科学博物館案内』には登場しないが、例えば後者では地階の「第十七室 地学部研究標本室」の紹介で、「一般的の地学部標本は三階第七室に陳列するも、純学術的標本は此室に収められ、特別研究者には自由に使用せしむ」と、二元陳列の様子が伝えられている。いずれにしても、本書での「二元」の言葉の登場は注目し得るものである。

小倉 謙「植物学部の陳列」は、「未完成の物が多い。」と、他部に比べて劣っていると正直に述べて、その現状を説いている。そして代表標本と種々の模型によって行われていることを述べ

つつ、模型製作にかかる手間暇（所要時間）にも話が及んでいる。

そして「東京科学博物館の建築」は、まず当時の流行とも言える「ライト式・表現派」などではなく、「極めて平凡なる様式」を採用したことを述べる。それは「博物館の性質上、時代の変化によりて余り動きのある様式は避けた方が宜しいとの希望もあつたことを伝える。そして、飛行機型となる同館の室配置などを説明した後、陳列室、そして陳列ケースと、内容は細部に及ぶ。そして、「苦心を払った積り」ながら、天井の低さ、電気系統の不備なども明らかにしている。

山本一清「星の天をそのまゝに見せる プラネタリウム 遊星儀の話」

これは、まだ日本にプラネタリウムが存在しない中での貴重な紹介文の一つになる。

プラネタリウム開発の歴史から、ツァイスⅠ型の外形図や水星映写器の内部構造を図示するなど、かなり詳細な機器の説明の後、ツァイスⅡ型を「最近型」として紹介し、世界各地に設けられつつあることを伝えている。

さらに興味深いのは、プラネタリウムを「教育設備」と捉え、「天文博物館を兼ねたプラネタリウムが近き将来に建設されることを待望して已まぬ」と言い、続けて「吾が京都大学の天文設備は事実上殆んど花山へ移転したので、大学内にある元の大観測室の九メートルドームを日本最初のプラネタリウムとして近々に利用したい心算で居る。」と結んでいることであり、日本初のプラネタリウムを構想していたことである。しかし、現実はその思う通りとはならず、前述した通りこの6年後に大阪市立電気科学館の開館をもって日本初ということになるのであった。

もともと、山本は昭和2年の『天界』9月号で「日本に於いても諸所の大都市に右器械装置さるべく目下交渉中である」と記しているように、以前から相応の動きはあったことが知られる。また、大阪電気軌道株式会社（現近鉄）や阪神電鉄でも計画があったことが知られている⁽⁵⁾。しかし、山本自身からその場所も明らかにされつつ設置を期待していたことがわかる一般向けの文章に触れることができるのが特筆される。このように、さまざまな思惑が確認できるのも本誌の興味深いところである。

棚橋源太郎「衛生博物館の設備」

続いて日本の博物館学の泰斗、棚橋源太郎が執筆しているのも注目される。棚橋源太郎は、この年日本博物館協会の専務理事となり、日本赤十字参考館の経営にも携わっていたのであるが、敢えて肩書きを加えずに執筆しているところは気になるところである。同年11月2日の東京科学博物館の復興開館に当たっての行幸啓において、前館長として天皇皇后への拝謁と直接言葉をかけられるという名誉に浴したのであるが、執筆内容との齟齬等を考慮したのか、敢えて明確な肩書きを示すことがなかったのかもしれない。

その内容は、それまでの日本国内の衛生博物館事情を述べた後、視察を行った海外の衛生博物館からドレスデン（ドイツ）、モンス（ベルギー）、パリ（フランス）を簡略に紹介。そして日本赤十字社参考館について解説を加える。模型の多用、ジオラマの応用、所謂ハンズ・オン展示（「器械類のハンドルを動かしたり」や「動力のスイッチを押して、見物人親らこれを試用し」などの記述）、さらに教育事業として衛生参考品の館外貸出などにも触れている。

松縄信太「我が鉄道博物館」

鉄道博物館（その後の交通博物館、現在は再び鉄道博物館）の沿革から本誌刊行当時の様子を述べる。そして「何んな気持で経営してゐるか」との章を設け、「施設を最も効果的のものとする」方法として、「入場者の誘致」、「入場者に便宜を与へる」、「理解し易からしめ興味を興さす事」の3つを挙げる。特に入場者への便宜では、「手を触る可らず」の制札を除いたと、ここでも所謂ハンズ・オン展示に関する記述が見られるのである。

「その他の科学博物館」

▽北大附属博物館 ▽長岡高工科学工業博物館 ▽満鉄満蒙資源館
▽満洲工業博物館 ▽通信博物館 ▽名和昆虫陳列館

6館が紹介されている。現在も存在する館とそうでない館が半々となっている。満州の事例が2件入っているのも、時勢を表すものである。なお最初の北大附属の博物館のみ、文章末に括弧書きで執筆者が大島正満であることが明らかであるが、その他は未記載で、筆者は不明である。

そして、最後に挙げられた資料製作（模型・剥製等）に関する3本は、まさしく Museography についてのより具体的な話題であり、興味深い。

小糸忠次郎「蠟製模型の簡易な製作法とその苦心」

表題の通り、蠟製模型について述べるが、レモンを題材に石膏によるその型取りの方法と蠟抜きを説明する。家庭でも出来る簡便な方法を紹介することで、模型（ここでは模造品と言うべきか）への関心を高めている。そして、テッポウウリの種子放射の様子（種子が飛び出す瞬間）の模型製作で、交替で5日4晩観察し続けるという「隠れた苦心」も紹介している。

ところで、これらから思い出すのは食品サンプルの世界である。現在では、動感のある食品サンプルも多く眼にするようになったが、上記のテッポウウリは、まさしく動感をもったレプリカとなっているのである。また、西尾惣次郎や須藤勉、そして岩崎瀧三と、大正から昭和初期の食品サンプルの歴史も明らかとなっているが⁽⁶⁾、小糸忠次郎による当文章はそういった流れの中で考えることが可能ではないかとも思うのである。

山越長七「模型製作の苦心を語る」

目次にはなかったが、本文では「斬新な模型製作の一例」の副題がつく。当時にあつて斬新な展示（模型）として「釦を押すことによつて電動仕掛で動作せしむる」といったように、「一段の進歩を現はして」きており、これも所謂ハンズ・オン展示への流れを感じさせるものである。そして、寄生虫の拡大模型に電飾を仕掛け、理解を容易たらしめんとする苦心も語っている。

坂本喜一「鳥類の剥製法」

坂本喜一は本誌刊行の同年に『坂本式動物剥製及標本製作法』を執筆・出版している⁽⁷⁾。同書も片隅に紹介されているように、その剥製法は評価の定まったものであることがわかる。同書では鳥類、獣類、魚類、爬虫類、昆虫標本、液浸標本、貝類標本、腊葉標本などそれぞれの製作法や生態陳列のための生態標本などにも言及しているが、本誌では紙数の都合もあり、表題の通り鳥類のみを文章で簡潔に解説したもので、著者にとってやや不満の残るものではなかったかと思

われる。

以上の通り、この特集号では、現在でいうところのハンズ・オン展示の意義が随所で説かれていることが確認できた。また、二元陳列という考え方（「二元」の用語使用）が登場したというその内容や、プラネタリウムに関する初期の詳説、さらに博物館の歴史や資料製作はもちろん、博物館づくりそのものに関わる内容を持つ、極めて中身の濃いものとなっているのである。

さらに言うと、館種としての科学博物館論について、もちろん本誌の特集は完璧とはいかないまでも、昭和6年当時として総論的なものになっている構成に近いもので、館種別博物館学とも言うべき「美術館学」「動物園学」「水族館学」などと称されることのあるものと同様に捉え、「科学（系）博物館学」を目指す端緒という趣きすら感じるものである。そして当時の博物館学の一つの到達点を示すとも言えるのではないかと考えるところなのである。

3. 『国際建築』第7巻第1号「特輯・博物館号」

国際建築協会により大正14年（1925）に創刊された建築専門雑誌で、本特集の発行は昭和6年1月10日である。体裁は四六倍判の並製、62頁仕立てで、「本号に限り」一円二十銭とある。

まず、国内外の博物館について、外観写真・内部写真や懸賞設計図、平面図・断面図などの60頁にわたる豊富な資料が巻頭を飾る。プレート数は73に上り⁽⁸⁾、海外ではドイツの例を最多としつつ、アメリカ・イギリス・スウェーデンなど、多数取り上げられている。中には「頂光の好ましからざる例」や「高い側光の好ましき例」といった、照明（採光）環境なども対象とし、建築内部に関するものも多く含まれる（写真4）。

続く本文の目次は次の通りである。

- 「博物館建築の計画」岸田日出刀 1～15頁
- 「博物館建築の採光」平山 嵩 16～26頁
- 「Historical Reconstruction」團 伊能 27～29頁
- 「東京帝室博物館本館新築に就ての希望」矢嶋正昭 30～37頁
- 「博物館当事者より見たる博物館建築」秋保安治 38～41頁
- 「ドイツの博物館所々」藏田周忠 42～47頁
- 「博物館雑考」今井兼次 48～51頁
- 「伯林博物館 「ムゼウムス・インゼル」 公開」藏田周忠 52～55頁



写真3 『国際建築』表紙

以後、目次に従い各文章の概要を記す。

岸田日出刀「博物館建築の計画」

東京大学教授で、後に日本建築学会の会長も務めた岸田による総論的な文章が特集の冒頭を飾る。

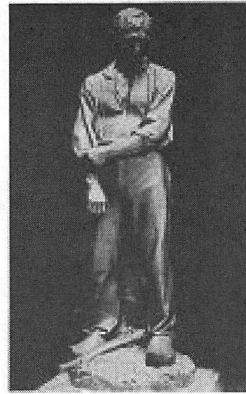
まず「各種建築に於て、日本が欧米よりもをくれてをるものは夥しくあるが、特にこの博物館建築に於て此の感を深ふする。」と、日本の現実を嘆く。そして、ここで対象とするのは「古美術博物館」とした上で、その課題を述べる。

平面計画については、図を示しながらそのあり方を述べる。「標準型」として中央に「玄関・広間・階段其他一般陳列室以外の所要諸室を配し」、その両側に陳列室が展開する平面計画のほか、「広間式」「通抜け式」「廊下式」の3種を紹介する。また、所要諸室については、東京帝室博物館の諸室案を示しながら述べる。その後陳列室の大きさと採光法の関係について述べる。時代性を反映してか、外光を採り入れる方法に関しての記述である。上述した巻頭のプレート（写真4）などは、本項に関係するものである。「側光線」「頂光線」

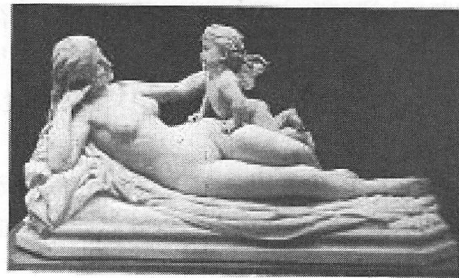
について説明した後、グレアの問題などにも触れる。そして最後に「物品保存の問題」として、「管理上最も重要な事項」である保存に触れ、東京帝室博物館の調査報告の要旨を挙げて簡単に触れるものであるが、そういった課題も漏れなく盛り込んでいるところは評価されるものであろう。

平山嵩「博物館建築の採光」

後に日本照明学会会長を務めた平山が、博物館の採光計画について論述。岸田が既に概要を述べているが、さらに念を入れての記述となる。「天窓及び側面光線の場合を述べ」る中で、さらに「窓を全然取らない建築が盛になつて来た」という傾向について工場に例を取り「その主なる理由は建築費の節減にもなるし、建物が丈夫になるし、一年中均等の照度を得られる等の利点から来たものであるが、一方には太陽光線を見られないと云ふ不快感を伴ひ、能率増進の点からは如何かと思はれる点が少なくない。」と言うように、その時代性を垣間見てしまうのである。



40 岸田日出刀の「博物館建築の計画」の巻頭ページ
The Example of Top Light



41 高い側光の好ましき例 - コーナーの彫刻と壁
Good Example of High Side Light

写真4 『国際建築』プレートから
(上)「頂光の好ましからざる例」
(下)「高い側光の好ましき例」

そのように、外光を採り入れる方法を縷々述べた後、最後にわずか4行で人工照明について触れている。一応図示しながら「フィラデルフィア美術館」「英国ベリオッドルーム」「クリーブランド美術館」の諸例を参考にしており、さらに最後に「回転自在にして光線調節用のルーブル及び回転装置を注意すべきである。」と記述するが、参考とし難いもので、外光採用の意識がやはり伺われるのである。

なお、岸田や平山の文章に呼応するように、「同人後記」においても、採光について帝博のために実物大の模型を作って実験中であることが紹介されている。

團伊能「HISTORIC RECONSTRUCTION」

実業家である團が、「文化博物館又美術館」の建築に対する考えを披露する。「内容に対して Anti historic な建築形式を持たしむる事は建築外形がこの文化博物館を訪ふものに、内容の観照態度を準備させる役目に全く役立たない」とし、「文化博物館に内容と調和す可き歴史形式の還元が当然な問題」と述べる。現代はその考えに逆行するものも多くあるが、もちろんその限りではない。いずれにしるそれは当時の一つの考え方であり、モダニズム建築への批判とも読み取れるようにも思われるが、果たしてその真意は不明と言わざるを得ない。そして、詳細は省略するが、「歴史還元の理由」を3点上げ、その実行のための「反対命題」が4点ほど示され、またさらに「文化博物館の合目的性」上批判する時、7つの困難があると説く。その結果、「外形」、「室内」「光線の方向」の3点について「暗示的還元」、「雰囲気」等の言葉を用いて、文化博物館には Historic なものが相応しいと結論づけている。

矢嶋正昭「東京帝室博物館本館新築に就ての希望」

「帝室博物館に執務」する立場から、競技設計に付された本館建築について縷々希望を述べる。本音が次々と綴られ、かなり挑発的な言い分があるという点で、読物としては「面白い」ということができるかもしれない。「東京博物館の頂上にある、碗を被せた様な形も全く呆れざるを得ない」とか、「東京府美術館、美術学校陳列館等は、形態、色彩、採光、間取其他問題にならざる下作」と手厳しい。また、「外樋でない」と思ふなどの言もある。

しかし、「陳列室の壁面の色彩、入口の大きさ、防湿の方法、床と音響との関係、塵埃除去の方法、盗難予防、平面利用並に側面利用、換気、通風、採暖等も考慮して欲しい」とか、「食堂が必要」、「博物館に必要なは完全の倉庫」などと、視点が多岐にわたることを忘れず、また、「事務室に日光の射し入る事を希望する」のは、「博物館は物が本位であるが、然し物を活かすは人にある」と、ハードからソフトにも配慮した現れであり、さらに「唯さへ博物館的と言はれる館員は、常に晴ればれした事務室に明るい気分で執務し得る様に致したい」と、ある意味 E S (Employee Satisfaction) にも通じる考え方も含まれているのである。

そして、「尚陳列室へは、エレベーターを利用して膝行車のまゝ観覧出来る様に願ひたい。」という一文もある。これは、博物館においてバリアフリーを考えるものとしては、かなり早い時期に位置づけられ、その意味でも注目される文章である。

このように、細かな内容は時代性故と認識しつつも、先進的とも捉えられる文章と思われる。

秋保安治「博物館当事者より観たる博物館建築」

東京科学博物館館長の秋保が博物館建築に寄せる期待を述べるものではあるが、「博物館のやうに我国に採るべき範の無い国」と言い、そして「欧米先進国の夫れを猿真似することも困る」と、今後への注意を促す。さらには、「下足預りの問題とか小泥棒が多いとか、子供のいたづらが多い。紙屑を無遠慮に棄てる。処嫌はず啖を吐く。便所を汚す。西洋風建築に馴れぬ。規則を厳守せぬ等々」と、日本人のリテラシーの無さを嘆く。しかしその後は博物館側と建築家側の連携（歩み寄り）も説き、「建築家の考へたまゝで宜しいとは遺憾ながら申し兼ねる」、「建築上多少の不体裁はあつても使用上に無駄なきことを本体とすべき」と言い、さらにアメリカでは「博物館長と建築技師とが少なくも二ヶ年設計を練上げ」ることを紹介しながら、念入りに計画を立てるべきことを説いている。

藏田周忠「ドイツの博物館所々」

『博物館建築』に於ては特に設備が最重要点である。—プランを含めての諸設備の充実。その工学的基礎の上のみ上部構造が成り立つ。形にはそれとの有機的表現法が要求されるだけで、そこに記念性が内容付けられる。要は組織であり、組織の機能的特殊研究による工学の分野が最も大切な役割を持つ。

武蔵高等工科学校（現東京都市大学）教授の藏田がドイツの博物館を見聞して得た「結論はこれだけ」とまず言うが、その後「博物館建築はその組織の如何によつて、プランなり設備なりの工学的取扱ひが今後益々多様に特殊的研究による開拓の余地を示すやうに考へられる。」と、館種により視点の異なることを予察する。そして「教育博物館」、「自然史、人類学的博物館」、「画廊（絵画及彫刻博物館）」、「工芸博物館」に分けて、ドイツの事例を基にその特質等を述べている。

今井兼次「博物館雑考」

帝国美術学院（現武蔵野美術大学）設立に関わり、その後早稲田大学教授を務めた今井は、「博物館の建築計画には公衆と管理者側及陳列されるものとの相互関係を考慮に加へ行かなければならない」とし、また「観覧者の循環作用が何等の抵抗を感じることなしに行はれ、順序よく陳列室を縫つて出口に流動してゆくことが可能であつて欲しい。」と述べる。そして採光問題を上げ、さらに「貯蔵室」の完備も上げる。今井の文章の特徴の一つは、建築家を登場させている点である。カール・モーゼル（「クンスト・ハウス」の設計者）、エルンスト・トルルフ（「ナチュラル・サイエンス・ムゼー」の設計者）の写真を掲げつつ述べ、建築家と博物館建築の関係に迫ろうとしているのは、他と異なる視点である。

藏田周忠「伯林博物館 「ムゼウムス・インゼル」 公開」

先にもドイツの博物館を紹介した藏田であるが、「ムゼウムス・インゼル」、即ち博物館島という1907年起工で22年を費やして造られ公開されたばかりの博物館群を、ベルリンから送った速報として、いち早く紹介するものである。例えばベルガモン神殿の柱列とレリーフを納める「大室」について、写真付きでその偉容を見せるなど、その様子がうまく伝えられている。その後、

「何しろ建て増しを重ね、大構成を誇つてゐるこの伯林博物館地帯を一通り見るにも四日や五日はかかるであらう。」と結んでいる。

最後に「東京帝室博物館建築設計図案 懸賞募集規定要項」が掲載されているが、前年の12月17日付で官報及び14種の新聞に公告されたものが、その後本誌にも掲載されたものであった。

以上のような、博物館を題材にその建築という要素がここまで大きく取り上げられていることは、昭和6年という時代としては異例のことかもしれない。しかし、それほど博物館というものに対する社会的認識が高まった現れの一つではないかとも思うのである。とは言っても、閉鎖的空間の上での人工照明ではなく、外光を採り入れる方法にその効果を求めて論述されているなど、やはり時代性として認識するしかないものがあるのも確かであろう。

また、欧米に倣うという姿勢が強いのも確かかもしれない。それほど建築としての博物館が、これからに期待せざるを得ないものであるという現れとも思われる。

4. 昭和6年の出版物による博物館を取り巻く状況

今回紹介した雑誌が刊行された昭和6年において、博物館学に関して挙げるべき書籍はこの二誌のみではない。後藤守一の『欧米博物館の施設』の刊行があり、また、雑誌『郷土』第6号⁽⁹⁾で棚橋源太郎、森金次郎による郷土博物館に関する論考二編の掲載、また、当年は『国際建築』に募集規定の掲載された東京帝室博物館の競技設計の審査が行われ、その当選設計図集も刊行されている⁽¹⁰⁾。いずれにしても「博物館」というと、まだ帝室博物館や東京科学博物館といった国立博物館を中心として、そこに郷土博物館などの議論が加わるような時勢であったことがわかる。今回紹介の二誌編集のきっかけが、実際は東京帝室博物館と東京科学博物館という、二つの国立博物館の計画または完成というのも事実であり、その他の博物館建設計画がきっかけで特集として明快に組まれると言う状況には、なかなかあり得なかったと言う時代性を感じてしまう。

ところで、上述の『郷土』第6号から、さらに同年『郷土教育』と名称を変更して刊行されたその第7号⁽¹¹⁾には、「第一回郷土教育協議会並講演会」の概要が報告されている。そこには登壇者の棚橋源太郎の講演「大都市の郷土教育」の要旨もある。意外と見落とされがちなものと判断するところであり、ここにその掲載された要旨全文を参考までに記しておくこととする。

私は明治廿二三年、東京高等師範学校卒業頃から郷土科なるものの必要を感じ、理科出身である処から、作業的に郷土に観察の眼を着けて来た。殊に独逸に留学した頃にはドレスデン辺りで實際教育の状況を観察し、郷土博物館の発達を見て来たが、此処十年以来は小さな村にまでその設備が成つて居るのに感じた次第である。博物館の内には、その土地の生んだ偉人の事歴や由縁の物、また産業に関するもの、地理的模型などがあり、人文に関する室などもあつて、時々幻燈で講話会などを開いて居る。由来、考古学、土俗学等の方面はスエーデンに発達し、それから、独逸、仏蘭西、英国等へ影響を及ぼしたもので、そのストックホルムには原型のまゝの古事蹟物を沢山保存して居る。所謂戶外博物館がそれである。扱て今

度欧州諸国を廻つて独逸へ行つて見ると、軍備を制限せられて居るので、青年訓練が非常に発達して、かのワンダーフォーゲルの如き、十八九歳の成年男女が盛んに民族的な地方郷土の踊りなどをやつて居るのを見たりしたが、独逸の青年が徒らに都会を慕ふことなく、郷土で楽しく暮す風習を養つて居るのを非常に面白く思つた。而もそれは天降りではなく、村の人達が自ら郷土愛によつて発動する行動であるから尊いのである。そして今日では欧州一般に郷土教育なるものは盛んであるが、北米は此の点は後れて居る。しかし最近巴里、伯林、倫敦に劣らぬ大規模の郷土博物館が紐育に出来たので、それによつて大紐育発達の有様がはつきり判るやうになつた。また日本では今度大阪でその天主閣を復興して大阪郷土博物館を起すさうであるが、東京では未だ左様な計画のないのは頗る遺憾である。

5. おわりに

「博物館学」という言葉は、昭和初期には意外と多くの博物館関係者の認識下におかれつつあった時期である。そしてこの時期は、博物館学史の中で「躍動期」に当たるものと筆者は考えている⁽¹²⁾。今回紹介の二誌は、まさしくその時期に当たるもので、それぞれ「博物館学」という言葉こそ見出せないものの、全体として「博物館学」という学問分野を意識しているようにも思えるし、なんと言つてもその当時の貴重文献であることは間違いないものだろう。その意味でも、博物館学の重要文献としては是非とも一度確認して頂きたいと考え、紹介した次第である。

筆者自身、さらに古文獻の発掘には力を尽くして行きたいと思う。それは、博物館学史の編成に関わることであるし、博物館学を目指す者としての責務であると感じるのである。

註

- (1) 山本哲也 2007『「博物館学」を遡る』『博物館学雑誌』第33巻第1号 全日本博物館学会
- (2) 山本哲也「博物館関係文献資料紹介」『学会ニュース』No. 90以降連載中。その6回目には、本稿と歩調を合わせることを意識し、『科学雑誌』創刊号などを取り上げた。
 - その1《復興東京帝室博物館関係①》 No. 90 掲載 (2009年10月31日発行)
 - その2《復興東京帝室博物館関係②》 No. 91 掲載 (2010年2月8日発行)
 - その3《高島春雄の著作から》 No. 92 掲載 (2010年4月30日発行)
 - その4《まんがはじめて物語》 No. 93 掲載 (2010年7月31日発行)
 - その5《『亜行日記』の正体》 No. 94 掲載 (2010年10月31日発行)
 - その6《雑誌『科学知識』》 No. 95 掲載 (2011年2月14日発行)
 - その7《剥製とその展示について》 No. 96 掲載 (2011年4月30日発行)
- (3) 巻頭の目次と本文とで、タイトルや執筆者名に相違や誤りが一部にみられる。目次の列記は巻頭目次に本文紹介では本文の表記に従っている。『国際建築』も同様である。
- (4) 青木 豊 2003『博物館展示の研究』雄山閣
棚橋源太郎『博物館学綱要』には以下のように記載されている。
「資料の二元的配置 (中略) 全蒐集資料を、学者専門家の研究に資する研究資料と、児童生徒や

一般大衆の観覧に供するための陳列資料との二つに分離しなければならないのは当然である。而して研究資料はこれを貯蔵室に収容し、陳列資料はこれを陳列館に展示すべきである。この資料の二元的配置 (Dual arrangement) は、独り大規模の博物館ばかりでなく、小規模の博物館と雖も必ず実施しなければならない。」

その他全てを確認しているわけではないので「二元」の初出が何であるのか明確ではないが、その遡及も今後の課題であろう。

- (5) 加藤賢一 2007「わが国最初のプラネタリウム」『大阪市立科学館研究報告』17巻
- (6) 野瀬泰申 2002『眼で食べる日本人 食品サンプルはこうして生まれた』旭屋出版
高田英太郎 1982『蠟の花一模型王・岩崎瀧三伝』株式会社いわさき 他
- (7) 坂本喜一 1931『坂本式動物剥製及標本製作法』平凡社
『学会ニュース』No. 96「博物館関係文献資料紹介」(註2)で紹介したので参照されたい。
- (8) 実際に付された番号は75を最後とするが、44・45が欠番となっている。当該頁部分には「正誤」として「プレート三十三頁よりのプレートNo. 46→75は44→73の誤」。との小紙が挿入されている。なお、目次のプレートナンバーは73までとなっている。さらに言うと、表紙には「外観・内部・懸賞設計 43PLATES」「平面図・断面図 31PLATES」とあるが、後者は30の誤りである。
- (9) 昭和6年4月1日 刀江書院発行
- (10) 山本哲也 2005「大正～昭和初期の博物館建築競技設計資料について」『國學院大學博物館学紀要』第29輯 國學院大學博物館学研究室
- (11) 昭和6年5月1日 刀江書院発行
- (12) そもそも博物館学史の時期区分の捉え方は研究者それぞれで相違があるかもしれないが、例えば加藤有次は博物館学史を、まず「黎明期」について「Ⅰ前史 明治期～終戦期」と「Ⅱ終戦期～博物館法制定」とし、それに続けて「試行期」(さらに博物館法成立～昭和30年代、昭和40年代と分ける)、「起動期～昭和50年代以降」とする(『博物館学史』『新版 博物館学講座』第1巻「博物館学概論」、2000年、雄山閣)。また、青木豊は明治初期以前を「前夜」、明治中期～後期を「確立期」、大正時代を「発展期」、昭和初年～戦前期(内容的には戦中期と思われる)を「変革期」、昭和20～40年代を「社会への浸透期」、昭和50年～昭和末を「乖離の時代」としている(『博物館学史序論』『國學院大學博物館学紀要』第34輯、2010年、國學院大學博物館学研究室)。

これらに対し、筆者は万延元年(1860)の遣米使節団より前を「前史」、それより後、明治5年の「博物館」開館までを「胎動期」、その後明治末頃(明治44年『西遊式年 欧米文明記』で黒板勝美が「博物館学」という用語を日本で初めて使用した時)までを「黎明期」、博物館事業促進会発足(昭和3年)までを「始動期」、そしてその後博物館法制定までを「躍動期」と考えている。すなわち、「博物館」の存在、「博物館学」という言葉の意識、組織的な動き、博物館学における法との関連など、さまざまな面期こそ見極めるべきと考えるからであり、単純に明治や大正、または〇年代という時代や数字上の年代などでの区分では説明しきれないと考えるのである。その詳細を表明することが今回の目的ではないのでさらに詳細は控え、それについては別稿の用意を考えているが、いずれにしても今回話題とする昭和6年を、筆者は博物館学「躍動期」と考えておくものである。